

デカセギと家族(4)

デカセギと家族(4)

—— 日本で育った子どもが帰ってから・D一家の場合 ——

樋口直人 (徳島大学)

稲葉奈々子 (茨城大学)

1. 問題の所在

移民現象は送出国と受入国で双方向的に展開していくが、受入国に定住した移民に比較して送出国に帰還した移民に関する研究は数少ない。これは世界的な傾向といってよいが、南米日系人のデカセギについては特にその傾向が目立つ。デカセギという一時滞在を含意する言葉が用いられる以上、本拠たる南米側に対する目配りはもっとなされるべきだろう。

筆者らは、そうした観点からアルゼンチンと日本の双方でデカセギについての聞き取り調査を2005年から実施してきた。調査はまだ継続中だが、2008年9月現在で予備調査28件、本調査では247名に対して聞き取りを行った。調査は2009年度まで続ける予定であり、本稿はその中間報告の1つである⁽¹⁾。調査を進めるに際して、家族単位のデカセギが法的制度的にはほぼ自由に行える日系人の場合、家族に着目した研究が必要であることを認識するようになった。ただし筆者らは家族研究の専門家ではないため、さしあたりは家族という単位でデカセギがどのようなようになされ、それぞれのどのような帰結をもたらしたかを記述する方針をとっている(樋口・稲葉 2008a, 2008b; 稲葉・樋口 2008)。

本稿で取り上げるD一家は、日本で教育を受けた子どもが一定年齢に達してからアルゼンチンに帰国し、親子ともども帰国後の再適応を迫られた事例である。子どもの教育については、多くの研究者やマスコミが関心を持っていることもあり、今後こうした経験を持つ若年層に聞き取りを積み重ねていく予定であるが、本稿はその端緒として位置づけられる。

2. D 一家について

D 一家に対する聞き取りは、2008年7月24日にブエノスアイレス市内の D 夫妻宅で、夫妻に対してまず行った。次いで同年8月12日に長女と長男、長女の夫にも聞き取りした。本稿の記述はこの5名への聞き取りにもとづいている。

D 氏夫妻は調査時点で40代でともに日系二世であり、アルゼンチンで生まれた。2人は大学の同級生で学生結婚し、学生時代に長男と長女が生まれている。日本で次女が生まれ、子どもは3名いる。長女は、アルゼンチンへの帰国後に同じく親のデカセギに伴い日本に住んだ経験のある日系人と結婚し、2008年には子ども1人を出産した。現在はこの7名で同居している。

この家族の滞日経験は、1988年に夫が単身で出稼ぎに行ったことを端緒とする。それから1年半していったん彼はアルゼンチンに戻り、妻と子ども2人を連れて再び渡日した。それから1回は引越しをするがずっと埼玉県内に居住し、2003年にアルゼンチンに戻って現在に至っている。この一家の特徴として、まず工場労働を経て IT 関係のビジネスを夫が自ら立ち上げ、日本で7年間この会社を経営していたことが挙げられる。これは帰国後の一家の生計にも大きく関わっている。

次に、子どもが小さいうちに渡日して、就学年齢を過ぎてからアルゼンチンに戻った点にも注意したい。D 夫妻は、渡日当初は日本語がほとんどできなかったが、10年以上の滞在を経て会話には不自由しなくなった。3人の子どもは日本で教育を受けたため、アルゼンチンに戻った時にはスペイン語がほとんどできなかった。いわば就学年齢になって渡日する子どもと逆の状況に置かれたわけだが、それにどう対処してきたのか。以下ではこの2つの点を念頭におきつつ D 一家の軌跡をみていきたい。

3. 工場労働者から IT 企業家へ——夫のキャリアアップ

D 夫妻は双方とも大学で情報工学を専攻していた。夫の方は、アルゼンチ

ンにいたときから昼間はソフト開発の会社で働き、夜間に大学に通っていた。学生結婚で子どもが2人おり、妻が働けないなかでハイパーインフレがアルゼンチンを襲い、生活が大変だったため、当初は1年の予定で兄と一緒にデカセギに出た。ただし、渡日に際してもどのような仕事でも良いというわけではなく、前職と関連性のある仕事を探して友人に紹介してもらい、工場でコンピュータを使うオペレーターの仕事に就いた。しかし1年たってもアルゼンチンの状況は変わらないし、その後の生活を営めるほどの貯金もできないので、いったん戻ったうえで1989年に家族4人で再び渡日する。

妻は渡日後外で働くことはなかった。子どもに日本語を覚えてほしいので公立保育園に入園させるに際して、親が働いていることが入園の条件となるため、その間だけ内職をした程度である。したがって一家の生計は夫の働きいかんとなるが、夫は定時だけの仕事だと1ヶ月30万円にもならないので残業を多くこなし、月額平均45万円くらいを稼いでいた。それに加えて、アルゼンチンでやっていたソフト開発の仕事も日本で継続しており、アルゼンチンから仕事を請け負い、家に帰ってからプログラムを組んでアルゼンチンに送っていた。当時は電子メールもなかったので、フロッピーディスクをやりとりしていたという。

このように、夫はシステムエンジニアとしての専門知識を日本でも常に生かそうとしていた。しかし、働いていた工場での仕事はコンピュータを扱うという点では無関係ではないが、ロボットが動作する際のパラメーターを設定する彼の仕事は、もともとの専門とは異なっていた。そのため、1996年には日本に住みつつ専門を生かす道として起業を思い立つ。彼はパスポートの更新などでアルゼンチン大使館を訪問した際、業務がまったく電子化されていないのを見ていた。そしてそこにビジネスチャンスが存在しており、査証業務などに関わるスペイン語のデータベースの構築と、そのソフトを搭載したパソコンのリースをセットで売り込んだという。

当時の夫の月収は、バブル崩壊後の日系人の収入としては相当高い部類に属しており、生活に支障はなかったし貯蓄もできていた。そうした安定した仕事を捨てることに対して、妻は反対だった。しかし、話し合った結果、好

きな仕事をやりたいという夫の希望が通り、日本での貯蓄をすべて使って有限会社を設立した。当初は、有限会社にするための300万円と、リース用のパソコン5台に付属品を調達する程度だったが、大使館に対する営業が成功してアルゼンチンとチリの大使館で採用された。2年契約でパソコンとシステムをリースし、パソコン自体は4年周期で更新していく。大使館向けの業務は他の中南米諸国の大使館にも広がり、会社の業績も伸びていった。

ただし、大使館向け業務はごく限定された市場しか存在せず、そのためブラジル人向けにも仕事を広げようと最初は赤字覚悟で大泉町に事務所を設立する。日本の不況はブラジル人労働者の残業時間を減らす結果をもたらしたが、それを逆にビジネスチャンスとしてみなしたからである。残業が減って時間ができれば、インターネットやパソコンに投資するようになる。滞日経験も長引けば、節約せずパソコンくらいは買うようになる——こうした計算は的中し、売り上げとしては大使館向けよりもブラジル人向けの業務のほうが大きくなったという。当初は1人での仕事だったのが、98年には2名雇用し、最終的には大泉の事務所に3名、大使館向けの東京事務所に2名の社員が働くようになっている。

4. 家族の生活——経験のギャップ

(1) ジェンダー化された滞日経験

こうしてピーク時には年商9000万円弱に達した企業を経営するようになった夫の経験は、しかしながら家族全体のそれと同じではない。自ら賃金を支払う立場になった結果、残業と家でのソフト開発をこなしていた工場時代よりさらに、夫は忙しい日々を送るようになった。土日もほとんどは仕事をしており、平日も家族と顔を合わせることがほとんどないくらい仕事に追われていた。経理関係は税理士にすべて任せており、駐車場を1つ余計に借りていたのも気づかないくらい、本業が忙しかったという。友人と会う暇もなかったが、アルゼンチンにいたときから仕事と勉強と家庭を抱えて忙しかったので、それ自体は苦痛ではなかった。

だが、そうした夫の不在に際して家庭や日本社会との付き合いを一手に担ったのは妻であった。前述のように、妻は一度も外で働いたことはなく、96年には次女を出産しているため3人の子育てと家事労働が主な仕事となる。我々が調査した限りでは、夫婦でデカセギして子どもがいる場合、託児所や保育園などに子どもを預けたとしても、出産時を除けば妻のほうはパートタイムで短時間働くことが多い。だがそれでも長時間労働を続ける夫に対して、育児やそれに伴う地域社会との付き合いを担うのは妻の側であり、日本社会一般と同様に滞日経験はジェンダー化されたものとなっている⁽²⁾。

D一家は1回引越した以外は安定して居住しているため、子育てに伴う日本社会一般との接点は通常の日系人よりも多い傾向にあったと考えられる。実際、85年生まれの長女が渡日したのが4歳の時であり、1歳で渡日した88年生まれの長男、96年生まれの次女と3人が保育園や学校に通ったため、学習の機会もあった一方、わずらわしい思いをすることも多かった。長男が中学に入ったときには、PTAの役員まで行きがかり上引き受けている⁽³⁾。毎週水曜日にはボランティアの日本語教室に通い、そこで友人もできる。ただし一家が住んでいた埼玉県にアルゼンチン人は少なく、同国人の友人は1人しかいなかった。

そうした環境のなかで抱いた違和感について、妻は2つのことを述べている。第1は、日本での付き合いが他人行儀に見えることで、親しくなっても距離をとることが求められる。保育園での母親同士で2人とは仲良くなって10年来の付き合いになるが、それでも〇〇さんという呼び方でなければならない。日本語教室で教わっていたボランティアの1人は、スペイン居住経験があったため特に仲良くなったが、2人のときには名前+さんで呼んでも他人の前では苗字+さんづけで呼ぶように言われる。

第2は、親同士の付き合いであり、日本語が十分できなかった頃にはわからないことが、だんだんわかるようになってかえって知らないほうが幸せだったのかとすら考えたという。保育園の集まりで、あの人は昼にならないと洗濯物を干さないなどと噂しているのを聞くと、なぜそれがいけないことなのか、話題になるようなことなのかと思う。それは、自分にも同様のまなざ

しが向けられているということであり、それを考えると気持ちがさめていくのを妻は感じていた。

さらに、日本語教室や子どもを通した付き合いがあったとはいえ、アルゼンチンにいたときと比べると社会関係から剥奪されていたのは明らかである。滞日最後の時期には、夫が仕事で必要だからと英会話教室に入会したが、忙しくて行けない夫の代わりに通ったら楽しくて3年間通ったという。しかし、そこで日本人と友人にはなるが、家を行き来するわけではなく教室で会ったときに食事をする程度にとどまっていた。家で会うことが少ない日本の習慣に馴染めないということであるが、これらはすべて妻の中で寂しさが蓄積されていく結果をもたらした⁽⁴⁾。

(2) 日本で社会化される子どもたち

子どもたちは幼少時に渡日するか日本で生まれているから、日本語には不自由がない。渡日直後は、日本語を覚えてほしくて保育園に入れるなど、子どもには日本に適応してほしいという気持ちが強かった。ただし、夫も妻も日本語があまりできなかったため、家の中ではスペイン語で話していたが、子どもは覚えなかったという。長男によれば、親がスペイン語で話しかけても興味が無いので頭に残らない、だから単語やちょっとした言い回ししか日本では知らなかった。

滞日期间が長くなるにつれて、夫も妻も日本語での意思疎通ができるようになり、家庭内では夫婦の会話を除いて日本語だけになっていく。D一家が日系人の集住地域には住まず、スペイン語を使う・教わる環境になかったことも影響しているだろう。学校にも、南米人の生徒はいなかった。こうして子どもたちは、日本語モノリンガルとして成長していった。

日本の学校では、スペイン語名であることから「ガイジン」と言われることも多少あったというが、特に大きな問題はなかった。長男は小学校4年からサッカークラブに入り、中学ではテニス部に入ってスポーツ中心の生活を送ったという。子どもたちは成績が良かったわけではないが、特に悪いわけでもなく高校進学も問題ないし補習塾に行く程度だった。疎外感を持ってい

た母親とは異なり、日本で生活するのが自明になっていた子どもたちにとって、それを変えたときの方がむしろ大変な思いをすることになる。

5. 帰国後の情況

(1) 帰国の経緯

一家のなかで、妻だけはずっといつかアルゼンチンに帰ると言い続けていた。夫は仕事が順調でずっと日本にいてもいいと思っていたし、子どもたちは言うだけでどうせ帰らないでしょうと思っていたという。

そうした状況が変化したのは、2002年をピークとしてビジネスの売上げが落ちてきたことによる。それまで業績が拡大し続けてきたのが止まったことで、夫も自らを見直すようになった。日本ではずっと朝6時から夜11時まで働く生活で、家族を見ることもあまりない。日本人ならそれが当たり前かもしれないが、アルゼンチン人にとってはそれだと家族で生活するとはいわない。子どもの学校での様子も休みのときの生活も知らないし、家賃も妻の出費額も把握していなかった。「それじゃあ日本人になってしまう」というのが妻の主張だが、夫も急にそう思うようになったのである。

気持ちが変わってからの決断は早かった。2003年の春休みには子どもたちに対してアルゼンチンに帰国すると告げると、すぐに荷物をまとめて春休みが明けて1週間後にはもう帰国の途についている。このとき長女は高校2年、長男は中学3年、次女は小学2年になるところだった。長男は、中学3年での受験勉強をしなくて済むのはよかったが、中学は卒業しなかったという。長女はさらに抵抗が強く、湘南台にいる伯父の家に住んで自分でアルバイトをしながらでも日本に残りたかった。しかし、家族が一緒にないとだめと言われ、「親は絶対だから」と皆で日本をあとにしたのである。

帰国に際し、夫は会社を売却ないし廃業しない代わりに、アルゼンチンでも生活の糧を得る途をつけてきた。誰でもできる仕事ではないから、売却といっても簡単ではない。技術がある人は資金がないし、資金がある人は技術がない。だから、会社を無償で社員に譲渡するのと引き換えに、アルゼンチ

ンに帰っても社員として雇用してもらうようにした。自らがシステムを構築した大使館向けのプログラムのメンテナンスをする代わりに、その分の給料をもらうわけである。開発者たる自分でなければできない仕事であり、システムのメンテナンスという物理的な距離が関係ない特性を生かしたからこそ、簡単に帰国を選べたともいえるだろう。

こうして帰国後の生計手段を確保した結果、日本で貯蓄した30万ドルすべてを投じて4階建ての立派な家を購入することができた。映画に出てきそうな瀟洒な家は、工場労働者として働くアルゼンチン人の数倍以上の貯蓄が何を可能にするかを物語る。加えて、持続的な収入源を確保することにより、貯蓄はなくても十分に生活できるだけの余裕が生まれたのである。

(2) 帰国後の教育問題

帰国後の子どもたちは、3人ともアルゼンチンで私立学校に編入した。私立学校の学費は月額800ペソであり、3人合わせれば2400ペソ（2008年7月時点のレートで約8万4千円）と2008年8月時点での最低賃金の2倍になる⁽⁵⁾。さらに、3人ともこれまでゼロに近かったスペイン語を習得すべく、家庭教師をつけて毎日来てもらうようにした。最初の1年は、進級するのが難しいから聴講生のような形で授業を取り、必要な単位だけをとるようにした。2年目からは、通常の授業を受講して進級するようになる。中学2年（アルゼンチンでは初等教育が7年、中等教育が5年一貫制）に編入し、中等教育をアルゼンチンで終えた長男の場合、次のような経験をしている。

2年に編入したが、テストの結果スペイン語と歴史は1年生の単位をとらねばならなかった。この年は進級できなくても仕方ないが、1年生の単位はとらねばと思って必死だった。日本では留年しないからスポーツ中心で勉強には熱心ではなかったが、アルゼンチンでは留年するからスポーツもやらず勉強中心の生活になった。5月に編入してから12月までは、午前中に学校に通って午後は日本語とスペイン語ができる家庭教師が毎日来て2時間勉強していた。進級はできなかったが、2つの科目はぎりぎり合格できた。それからは大分楽になり、家庭教師にも3年間ついてもらったが、2年目からはス

ペイン語だけになって回数も減らしていった。3年になるまでは追試を受けて進級していたが、4年生と5年生のときには追試も受けなくてすむようになった。

科目としてはスペイン語がもっとも大変だったという。日本にいるときから国語は好きではないし、ましてスペイン語だと読むのに慣れていないから時間がかかるし、意味も1つわからないところがあるとつまずいてしまう。それに語学の時間では、書き方を間違えると減点されるから、スペイン語だけはずっとぎりぎりでの合格だった。長女も、同様に数学や理科はついていけるがスペイン語や歴史で苦労している。だが、2人とも無事に中学を卒業できたことに鑑みれば、手厚いサポートにより教育問題はクリアできたといえるだろう。

(3) 子どもの社会的適応

デカセギにまつわる言説でしばしば取り上げられる帰国者の再適応問題は、D夫妻の場合には生じていない。持続可能な収入源を確保できたばかりでなく、仕事の上でも連続性を保つことができた点で、慣れ親しんだアルゼンチンへの帰国でほとんどマイナス面はなかった。だが、子どもたちが迫られるのは再適応ではなく、未知の地たるアルゼンチンへの適応である。教育での適応については前段で見たとおりであるが、それ以外にどのようなことが生じたのか。

まず、もっとも日本に戻りたい気持ちが強かった長女は、1年間は自分だけは何としても再渡日しようと思っていた。それが、現在の夫と交際するようになって落ち着いたという。ただし、中学を卒業してから1年後くらいには、夫と2人で日本に行く計画も立てているが、両親の反対で実現していない。長女の夫は、バイリンガルである強みを生かして、2007年から日本並に賃金がもらえる仕事についており、今では日本で働く必要もないという。

長女はアルゼンチンで教育を受けたのが3年間で弟妹に比べて短く、スペイン語を使って本格的に仕事をした経験もないので日本語のほうがずっと楽に話せる。長女の夫は8歳の時に日本から帰国し、それからスペイン語で教

育を受けて家の中でもスペイン語で話していたが、長女とはスペイン語と日本語を混ぜて話しているという。

それと対照的なのが次女であり、現在では家の中でもスペイン語で話すようになった。十代後半と7歳という帰国時の年齢の相違がもたらす差だといえるが、その中間にあるのが長男である。長男は、中学を卒業してから日本語も使うがスペイン語を主に使う企業に就職した。その意味で、スペイン語での実務には問題がない。ただし、時々スペイン語で考えることもあるが、基本的には日本語で発想する。他の家族との会話ではスペイン語と日本語を混ぜるが、長女との会話は日本語だけ。普段はスペイン語を使うように努力しているというが、感覚が似ている姉弟の会話でスペイン語を使うと「鳥肌が立つ」というところに、長男の言語感覚があるといえるだろう。

長男はスペイン語での道具的な意思疎通には不自由しなくなったが、表出的な側面まで使えるには至っていない。スペイン語の冗談がわからず、自分だけ会話についていけないこともあるし、自分でもスペイン語で冗談をうまくいえるわけではない。だから、日本では明るく見られるほうだったが、スペイン語ではどうせ通じないのだからと余分なことは言わないようになり、暗く見られているのではないかと自己分析していた。

長女は調査時点で生後4ヶ月の子どもを育てており、中学卒業後は短期の仕事しかしておらず、スペイン語の世界とはあまり接点を持たずに生活している。その意味で社会的適応がスムーズにできたとはいえないが、同じく日本帰りで日本語が自由に話せる相手との結婚が、アルゼンチンでの定锚となっている。それに対して長男の場合、適応の度合いは高く現在ではアルゼンチンに住むことを希望しているものの、日本への再渡航という選択肢を放棄していない。現に、2008年3月に中学を卒業した段階で長男は大学には進学せず、代わりに日本への留学試験を受験している。この年は大学ではなく留学に挑戦するものと決めて、奨学金が取れなければ留学を諦めてアルゼンチンの大学に進学するという。

さらに長男は、日本語を話せる若者のグループを作って2週間に1回は集まっている。当初は日本からアルゼンチンへの留学生と接点を持つように

なったが、その留学生に日本の大学の情報を集めるに際してミクシィを紹介され、2006年からミクシィを始めるようになった。そこでは、日本での出身中学のコミュニティもあり、時々参加しかつての同級生からもメールが来る。この若者グループに参加する日系人は、日系社会と接点を持たないが家庭や日本で日本語を覚えており、知り合うきっかけになったのもミクシィを通じてであった⁽⁶⁾。我々が聞き取りした範囲でも、十代になってからアルゼンチンに戻った子どもは一定数存在するが、多くは家族や親戚のサポートで対応している。周囲の日系人の若者は日本語を話せないため、スペイン語世界への一方向的な適応が必要になるが、それを緩和するグループが日本のミクシィを通じて形成されたことは興味深い。

6. 結語に代えて

D一家の軌跡についていえば、日本での生活と帰国後の適応に際していはば階級的な要因が大きく影響していることがわかる。夫は労働者としても十分な収入があったものの、自らビジネスを始めて成功することにより、日本でも不自由ない生活をしつつ貯蓄することができた。多くの場合、妻が仕事をせず夫の収入で子どもを含めた家族が生活すると、貯蓄はほとんどできなくなる。その意味で、日本での「主婦化」というジェンダー間分業と貯蓄を両立できたD一家は、新中間層になりえたがゆえの例外に属する⁽⁷⁾。妻はPTAの役員までしており、教育にも熱心だった。ただし、そうした恵まれた状況におかれた家族にあっても、スペイン語の継承はできていない。

日本から帰国してからも、自宅を購入して貯蓄が尽きたとはいえ日本の仕事を継続し、日本の賃金水準で生活できるだけの経済的基盤があることは重要である。アルゼンチンで日系人は实际的にも自己意識としても中間層であり、子どもの教育に対する投資には一般に熱心だといってよい。日本では労働者階級であり、そうであるがゆえに十分に教育投資できないのとは異なる。そして帰国後に、子どもに対して手厚いサポート体制がしかれたがゆえに、アルゼンチンでの教育上の適応がスムーズに進んだことは間違いない。

3人の子どもにこれだけのサポートができる経済的基盤があったからこそ、帰国を選択できたともいえるだろう。

ただし、そうしたサポート体制があったとしても、帰国時の年齢という要素はその後の適応に大きな影響を及ぼす。長女は日本語を話す夫がいることでアルゼンチンでの生活が現実的なものとなったが、スペイン語世界への本格的な参入は未だ果たしていない。その意味では、かつての一世の移民が経験したのと同じような日本語世界で生き続けねばならない可能性もある。長男は、適応の度合いは長女より高いものの、日本への留学を考えている⁽⁸⁾。仮に留学が果たされたとすれば、将来アルゼンチンで生活するという計画はその後の恋愛や結婚、アルゼンチンの家族の状況（病気や扶養など）によって変化する可能性が高い。帰国後の適応は、渡日後の適応といわばパラレルに生じる現象であるが、それに対して階級と年齢という2つの要素が及ぼす影響はどのようなものか。後者については、日本でも教育社会学者が経験的研究を行っているが、前者についても今後注意してみる必要があるだろう。

【注】

- (1) 我々のプロジェクトと時同じくして、ブラジル側の状況についての調査プロジェクトも行われるようになっていく。その中間的な報告については、『調査と社会理論』23-26号、北海道大学教育学研究科、2006～2008年を参照。
- (2) これとは対照的なのが、付添婦や仲居として働く（ほぼ全員が一世の）単身デカセギ女性の場合であり、職場に住み込みで働くことから地域社会との接点はゼロに等しい。どちらも再生産労働への特化がもたらす帰結であり、男性には見られない特徴といえる。デカセギについては多くの論考があるものの、ジェンダーによる差異に着目した議論には遭遇したことがない。我々自身の自戒をこめて、ジェンダー的観点からの分析がもっとなされてしかるべきと考える。
- (3) 連絡網の順番を決める際、自分が最初のほうだと廃品回収など細かな伝達が必要なときに正確に伝える自信がないから最後にしてくれ、と言ったところ代わりに役員をさせられたという。
- (4) 定期的にアルゼンチンに里帰りしていれば状況は違っていただかもしれないが、夫は一度も日本から出ず、妻と子どもたちは2000年の夏休みに1ヶ月アル

ゼンチンに行っただけである。実際、単身ならばともかく家族がいて頻繁に帰省するのは経済的には困難である。この点については、樋口・稲葉（2008b）も参照。

- (5) それまで980ペソだったのが、2008年8月1日から1200ペソに上がり、同年末には1240ペソに引き上げられることが予定されている。
- (6) 長男の紹介で、このグループへの参加者2人にも聞き取りをしたが（2008年8月23日、9月2日）、2名ともそれまで日系社会と接点を持っておらず、ミクシィを通じて初めて同年代の日系人と付き合うようになったという。
- (7) もちろん、工場労働者時代にあっても在宅でシステム開発の仕事を続けていたことが、夫の後の起業につながっている。この点でも、職業キャリアの不連続性が目立つデカセギ労働者のなかでは例外といってよい。
- (8) 長男はアルゼンチン国籍しか持たないため不可能だが、同じような状況で日本国籍を持つ友人はいわゆる帰国子女枠を使って日本の大学に進学する者もいるという。

文献

樋口直人・稲葉奈々子，2008a，「デカセギと家族(1)——日本就労の意図せざる結果・A家の場合」『徳島大学社会科学研究』21号。

———，2008b，「デカセギと家族(3)——完全な定住と事実上の定住の間・C家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』41号。

稲葉奈々子・樋口直人，2008，「デカセギと家族(2)——農園維持の世帯戦略・B家の場合」『茨城大学人文学部紀要（社会科学科論集）』46号。

村田翼夫編，2000，『在日経験ブラジル人・ペルー人帰国児童生徒の適応状況——異文化間教育の視点による分析』科学研究費報告書。

（付記）本稿は科学研究費による研究成果である。インタビューにお答え下さり、紹介の労をとっていただいたD一家の皆さんに感謝したい。